

癒しの空間デイケア施設

門司松ヶ江病院 デイケア 主任 河野由美子

居場所の提供

当院デイケアは、平成4年10月「居場所の提供」「再発防止」を目的に、5〜6名の通所者でスタートしました。平成7年には、病院の院庭を挟んでデイケア施設としての社会復帰棟が建てられ、体育館、福祉ホームが併設されました。3年後には、グループホームも開設しています。

緑に囲まれたデイケア施設は、四季おりおりの花々や小鳥のさえずりにつつまれ、木のぬくもりのある内部ではゆったりとした空間が広がり、こころを休めるのに最適で、アットホームな環境といえます。

デイケアは今年度で10年目を迎え、登録者80名、1日30〜40名の方が通所されています。利用者の構成は多様で、年齢的にも20代から70代までと幅広く、家族構成も単身の方から孫のいる方まで様々です。通所目的にも明らか違いが見られ、地域で安心した生活を維持しながら少しでも生活の質の向上を目指す長期通所メンバーに対し、若年層のメンバーは就職など将来的な目標をあげる方も多く、これからの生活スタイルを模索する過程でデイケアを利用されています。

生活の場の提供

当院デイケアでは、まず最初に心地よい居場所が得られるように配慮されていること、スタッフやメンバーに温かく迎えられ仲間に出会えること、受け入れられる世界があることを知っていたくことに心を配ります。生活上の障害や、精神的な症状が残っている方にとっては、のんびりと出来る場所、自由にのびのびと過ごせる空間が必要です。ある方は、「家族と一緒にいると肩身の狭い思いをする、気を遣う」と話されます。少し調子が良くなると、早く普通の生活に戻って欲しい、仕事をしたいなど期待されたり、励まされたりします。このことが逆にストレスとなって、家庭内の緊張感に耐えられず、症状が悪化したり、頑張ろうとして疲れたりしてしまい、自信を失うことにもなりかねません。

自由で楽しい仲間との体験の中から、一つ一つ心に張りが出てくるような支援を心がけています。

生活リズム作り

デイケア参加が決まると、面接の中で参加希望の曜日を決めて頂きます。生活リズム作りの為にも出来るだけ定期



社会復帰複合施設



的な参加を促し、決まった日時に参加し、デイケアの中で活動と休息のリズムを体験していきます。家庭にいたるだけでは、規則正しい生活を維持していくことが次第に難しくなり、人によっては、昼夜逆転した生活になったり、生活の乱れから服薬もおろそかになったりします。デイケアに参加し、一日のスケジュールを達成して帰途につくことで、日常生活を維持してい

くことが少しずつ可能になっていくように思います。

活動プログラムを通して

デイケアの中では、メンバーの自発性、自主性を尊重します。スタッフは同じ仲間として、一緒に楽しみます。管理的、威圧的な言葉や態度を排除し、できるだけデイケアの規則を少なくしてメンバーがこんなことをしたい、あんなことをしたいという気持ちを持ってるように工夫をします。

参加を強制せず、自由意志を尊重しながら時に参加を促していくこと。一つの体験が次の「自分がしたいもの」を見つけて実行する体験へ繋がる、その段階的体験の出来る場所がデイケアだと思えます。

小さなことでも、出来たことをひとつずつきちんと褒めることも必要です。人は褒められることでいるんな動機付けや意欲・気力が出てきたり、前向きに進む気持が生まれます。特に自信を失くしている方や、自己評価の低い方にとっては、この褒められる体験はとても大切なことのように思われます。気持の交流の中から信頼関係も生まれます。

当院では、一年を通じてその時々々の季節を感じながら、病院全体の伝統行事としてお花見・開院祭・キャンプ・盆踊り・運動会が行われています。

この他にも、毎月演芸会などメイン行事があり、デイケアも必ず参加します。

メンバー、スタッフそれぞれに役割分担を行い、話し合いを持ちながら、内容検討、作品作りなど、計画して進めて行きます。集団活動の中では、スタッフが予測もしなかった力を発揮される方がいらついたり、メンバー同志の支え合いがあつたりと、仲間意識を感じさせられます。

準備から反省会まで、協力して行事に参加することで協調性を養い、やり終えたという満足感を体験します。体験することで以前よりも、積極的にプログラムに取り組み姿も見られます。

また、活気ある意欲的なデイケアの姿は、毎回のように入院中の方々に魅了し希望へとつなげる一助となっているようです。デイケアに慣れてくると「ホッとすると、気持ちが安まる、気負わずに話が出来ると」などの声が良く通所者から聞かれますが、デイケアを中心とした生活に決して満足しているわけではありません。

次の一歩がなかなか踏み出せず悩んでいるのが現実です。

社会により近いデイケア活動とはいえ、やはり保護された環境下での安定にはかなりません。一旦、地域社会あるいは家庭に帰ると、また現実とのギャップに遭遇してしまいます。私達スタッフは、慰めたり、励ましたり、褒めたりということを通じて人間的アプローチを試みますが、社会参加は難しく、通所が長くなるにつれ、目標や希望が薄れ、気分転換や楽しむ目的の参加になっていきます。



喫茶



お花見 かくし芸

デイケアメンバー以外と接する機会も少なく、デイケアが対人交流の場になっているのが現実です。

治療的、訓練的なアプローチを大切にしながら共に歩み、メンバーが地域の中で、その人らしく、その能力にあった、自然な生活を作っていけるように援助することが今、私達に与えられた課題であるように思います。